

はしがき……………1

第I部 右近と清秀のルーツを求めて

第一章 戦国の幕開けと国人たち……………8

摂津をめぐる四つの「世界」／謎が多い中川清秀のルーツ／高山右近のルーツをたどる／
応仁の乱勃発に巻き込まれた国人たち／権門をも脅かす池田氏／
池田氏の富貴の源泉／畠山義就に従った三宅氏／半済をめぐるかけひき

第二章 守護と守護代の狭間で……………31

茨木・吹田氏の没落／勢力を伸ばす守護代薬師寺元長／上郡に下向する細川政元／
守護と守護代の対立／「守護所」となった茨木／高山荘の「高山殿」／
反旗を翻した薬師寺元一／地域社会を揺るがす永正の錯乱／蓮如と摂津の真宗門徒

第三章 京兆家の争いと国人……………55

京兆家をめぐる戦乱／孤高を貫く池田惣領家／細川高国を支える伊丹氏／
瓦林氏の越水築城と灘五郷／活動の幅を広げる北郡の塩川氏と能勢氏／
高国の命令に反する西郷諸侍中／細川高国による芥川築城／
高国の近習となった上郡の国人たち／一向一揆と細川晴国／

台頭する国人と京兆家の関係／一向一揆と国人庶子家

第II部 高山飛騨守の登場

第一章 覇権は細川から三好へ……………82

細川晴元と三好長慶／池田家中で台頭していく荒木氏／池田氏の被官となった中川氏／
將軍と結ぶ摂津の国人勢力／越水城主となった三好長慶／謎多き松永久秀の出自／
塩川国満と能勢氏の没落／西郷諸侍中と塩川氏の城跡／ザビエル上洛／
芥川城の晴元と芥川孫十郎／芥川城主としての三好長慶

第二章 高山ダリヨの誕生……………112

国人の名を称した土豪／高山荘に現れた飛騨守／松永久秀の下で沢城主となる／
洗礼を受ける飛騨守と右近／数を増やす河内キリシタン／なぜキリシタンになったのか／
教義ではなく人ありきの信仰／永祿政変の余波／和田惟政との接触／
不安定な立場の池田勝正／在国の將軍・義栄

第三章 和田惟政と池田勝正……………138

義昭と信長の芥川入城／勝正の「降伏」と池田城／義昭の摂津支配構想／
本圀寺合戦と新しい城郭の出現／惟政がキリシタンと交わった理由／
播磨攻めと惟政の出家／「金ヶ崎の退き口」と勝正追放／「石山合戦」のはじまり／
高まる軍事緊張／惟政が戦死した郡山合戦／合戦と「境目」の土豪

第Ⅲ部 摂津の大名に成り上がる

第一章 荒木村重離反の余波……………166

若き和田惟長の立場／高山父子による高槻城奪取／村重と右近の下克上／高槻に広まるキリスト教／キリスト教はどこで広まったのか／村重、大坂本願寺と結んで拳兵／高槻城落城に見る父子対立／右近を支えた一族と家臣／清秀、村重を離れて信長方へ／茨木城主と清秀の家臣

第二章 織田信長の摂津侵攻と右近・清秀……………194

信長が行った臨戦下の摂津支配／右近と清秀の対立／「北郡征伐」と塩川氏／有岡落城と家中の虐殺／「石山合戦」の終結と城郭／村重・右近・清秀の城の特徴／村重の後継者は清秀／信長の旗本となった右近と池田恒興／信長の摂津支配構想／本能寺の変と大坂

第三章 豊臣秀吉と戦国摂津の終焉……………221

山崎合戦での先陣争い／摂津の寺社への「焼き討ち」伝承／賤ヶ岳の合戦と清秀の最期／大坂築城と勢力の再編／秀吉が築いた「本丸」／秀吉の戦争と転封／入信する豊臣の武将たち／キリシタン武将への期待／伴天連追放令の影響／その後の中川氏と高山氏

あとがき 250／主要参考文献 252



『太平記英勇伝』に描かれた中川清秀 高槻市立しろあと歴史館蔵

第Ⅰ部 右近と清秀のルーツを求めて

第一章 戦国の幕開けと国人たち

摂津をめぐる四つの「世界」

戦国時代の摂津国には、四つのエリアがあった。古代以来の行政区分の郡ではなく、生活のなかで人々が「郡」だと感じたエリアである。地形や交通路にオリジナリティがあり、それぞれの勢力にも異なるカラーをもたらし（今谷一九八六、天野二〇一五）。どのようなルーツから、高山右近と中川清秀が大名へと成長していったのかを探るうえで、戦国の「郡」はポイントになる。

当時の記録には、上郡と下郡、欠郡が登場する。また、清秀の子孫が七万石の藩主となった豊後岡藩（大分県竹田市）が編纂した『中川氏御年譜』（以下、『中川年譜』と略）には、北郡という別のエリアがみえる。本書は、この四つの「世界」を紹介するところからはじめたい。

摂津国域は東西に長く、北は丹波国に続く北摂山地、南は大阪平野が広がる地形となる。北東では京都が所在する山城国に接し、羽柴秀吉と明智光秀が衝突した山崎合戦の舞台・山崎地峡から淀川が流れ込んで大阪湾へと注ぐ。淀川では京都と西国、さらには遠く海外を結ぶ舟運が発達し、豊富な物資と人、情報の行き来を可能とした。

北摂山地からは、南の大阪平野に向かって千里丘陵が突き出し、古代には京都を起点に九州大宰府（福岡県太宰府市）を終点とした山陽道の後身・西国街道（湯山道、播磨大道）がその上を西へと横断した。この丘陵の東側が「上郡」（行政区分では島上・島下郡）、西側が「下郡」（豊島・川辺・武庫・兔原・八部郡）とされ、上郡では守護、下郡では地元の国人が力を振るった。

戦国の摂津では、有馬郡を除いて細川氏の惣領家が守護をつとめた。細川氏は、室町幕府の足利將軍家の一門で、惣領家は代々が称した「右京大夫」の唐名「京兆」の名で呼ばれた（以下、「京兆家」と略）。將軍を補弼する管領に就く家柄で、京都に接した摂津・丹波の守護を兼ねる。このため、応仁の乱以降に各地の守護が在国をはじめなくなるなかでも京兆家は京都に在ること（在京）を志向し、京都に近い上郡を重視した。この上郡で、右近と清秀は大名となる。

下郡では、東部の猪名川流域を拠点とする国人の池田氏と伊丹氏が力を伸ばし、兵庫津（神戸市兵庫区）や尼崎（兵庫県尼崎市）という港町が発達した。清秀は、池田氏の家臣として経歴をスタートさせる。

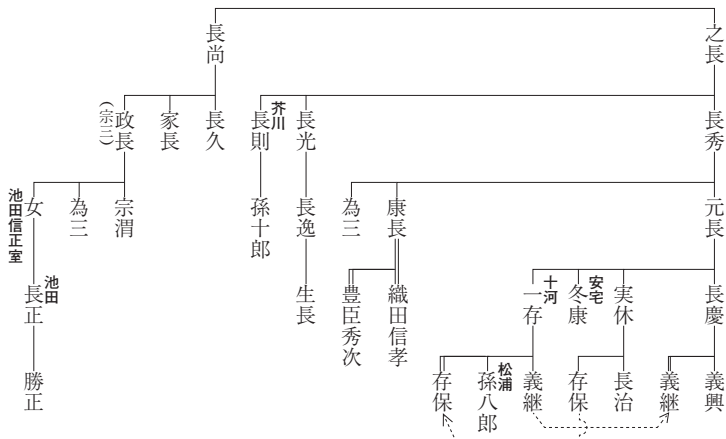
下郡と丹波との間の北摂山地は、東から能勢郡、川辺郡北部、有馬郡となる。有馬郡は有馬氏（播磨守護の赤松氏庶流）を分郡守護とする異色のエリアだが、一帯は古代に摂津源氏が発祥した多田荘ゆかりの地で、村々には源氏の祖霊を祀る多田神社（兵庫県川西市）に奉仕する多田院御家人が存在した。また、川辺郡北部とおそらく能勢郡では、十五世紀半ばまで京極氏が守護権を行使した。『中川年譜』では、天正七年（一五七九）の織田信忠による有馬・能勢郡への侵攻を「北郡征伐」と称し

第一章 覇権は細川から三好へ

細川晴元と三好長慶

本章では、およそ天文五年（一五三六）の天文法華の乱収束後から、三好長慶が芥川城（大阪府高槻市）を居城としてしばらく経った永祿元年（一五五八）までを扱う。細川晴元が畿内の中央を掌握し、その後には細川高国の後継として細川氏綱を擁する勢力が出現。やがて、長慶が晴元を駆逐する時代である。そして高山右近と中川清秀が生まれ、池田家中に中川氏が登場する時代でもあった。

はじめに、年代の目安となる出来事を概観し、以降の話につなげていきたい。天文五年七月八月、晴元と対立する京都の法華一揆と畿内の一向一揆、高国の弟・細川晴国を推す勢力が没落し、ようやく九月に晴元は長慶（千熊。翌年に利長）と波多野秀忠・木沢長政を率いて入京を果たす。晴元は三好一族の政長を重用し、天文八年に起きた河内十七か所という河内国茨田郡西部の大莊園をめぐる長慶と政長の争いは、晴元と長慶の対立に発展した。武力蜂起を図る長慶を將軍足利義晴は宥め、摂津国人らに説得を命じた。しかし、長慶は上郡の芥川城を占拠したうえ、軍勢を率いて上洛する。近江の六角氏が仲介して和睦が成立した後、長慶は越水城（兵庫県西宮市）を獲得し、以降は下郡で力を培うことになった。



系図4 三好氏略系図

天文十年になると、同じく政長への不満から北郡の塩川国満、下郡の伊丹親興、上郡の三宅国村という旧高国派の国人が晴元と対立し、木沢長政と手を組んだ。この背景には、高国の跡目を称する細川氏綱の登場もあった。しかし、国村は晴元に帰参し、翌年の河内太平寺（大阪府柏原市）の戦いで長政は討ち死にを遂げる。翌天文十二年、細川国慶らを味方に氏綱が挙兵したが、晴元は芥川城に入って軍勢を進めた長慶が鎮圧した。しかし、同十五年に再び氏綱は挙兵し、今度は守護代遊佐長教ら河内守護畠山氏の勢力の支援を受けて欠郡を制圧し、摂津でも国村と下郡の池田信正が氏綱方となった。

晴元方は、長慶の弟である阿波の三好之虎（実休）の来援によって勢いを取り戻す。天文十六年には下郡の原田城（同豊中市）を開かせ、上郡の三宅城（同茨木市）を落とした。奪還した芥川城には長慶一族の芥川孫十郎が入り、池田信正が舅の三好政長を通じて帰参した。そして欠郡の

第一章 荒木村重離反の余波

若き和田惟長の立場

本章では、主に元龜二年（一五七二）の郡山合戦後から天正六年（一五七八）までを取り扱う。いよいよ茨木城（大阪府茨木市）に中川清秀が入り、高槻城（同高槻市）主の座を高山右近が手に入れた時代である。將軍足利義昭を追放した織田信長が勢いを増すなか、最終的に摂津一国を支配した荒木村重が離反、本願寺と手を組んで挙兵する。そして、キリシタン大名が支配する高槻周辺では、キリスト教信仰が展開した時代でもある。

元龜二年八月二十八日の郡山合戦の際、父惟政の軍勢が壊滅した和田惟長は、兵を高槻城へと返す。軍勢は離散し、彼には少数の兵しか従わなかったという（一五七一年九月二十八（十八）日付けルイス・フロイス書簡）。惟政を失った高槻城には、松永勢が迫る。細川藤孝や佐久間信盛の働きで陣は払われるが、城引き渡しの噂が立った。九月九日、松永勢は淀川べりの柱本・三島江（同高槻市）まで陣を後退させる（『尋憲記』）。この三日後、信長が比叡山焼き討ちを決行した。

九月十八日になって、信長は摂津に吏僚の島田秀満しまだひでみつを遣わす。二十四日には明智光秀の軍勢約一千が高槻に向かい、翌日に義昭の奉公衆も出陣（『言継卿記』）し、義昭の武将である藤孝や光秀は、和

田氏の支援に動いた。一方で十月九日、三好三人衆らは三好義継を高槻城に入れようと動いている（『二條宴乗記』）。

この頃、義昭と信長の関係は急速に悪化し、義昭は反信長勢力との接触をはじめるが、義継や三人衆らとの対決を念頭に、信長とも連携した複雑な動きを採る。十一月十九日付けで羽柴秀吉は義昭配下の曾我助乗そがすけのりに書状を出し、高槻城の件は一件落着となったと報じた。池田氏と伊丹氏との間で長年の懸案が解決し、敵（松永勢か）に高槻城が攻められても両氏が一戦に及ぶという（『細川家文書』）。

惟長は何とか高槻城を確保し、十二月には神峯山寺の寺領を安堵して叔父和田惟増これまさも添状を出した（『神峯山寺文書』）。惟長の安堵状は、「仍状如件」よつてくだんのごとしで結ぶ当時の摂津では珍しい直状じきじょう形式のもので、家督継承への強い意志を示すと評価されている（下川二〇一一）。ただし、翌元龜三年二月に本山寺へ出した禁制（『本山寺文書』）の差し出しは、変わらず「愛菊」の幼名と「惟」という署名のままである一方、神峯山寺への安堵状とは花押の形が違う。若き高槻城主の不安定な立場を示すようだ。

本願寺の坊官下間正秀は、元龜三年正月四日付けの書状で織田勢が義継の若江城（大阪府東大阪市）を攻めたとするが、この陣中に「池田」がいた（『誓願寺文書』）。おそらく、池田勝正のことではないか。当時の大坂本願寺は、義継・松永久秀と手を組み、その背後に義昭が近づきつつあった。正秀は四月十四日付けの書状において、伊丹氏が信長の「扱」に不審を感じ、親類にあたる惟長と申し合わせて義継に通じたとしている。